

勝山織物絹織製作研究所

代表者：勝山 健史

所在地：〒399-3707 長野県上伊那郡飯島町飯島 197-8

Tel：075-461-1444 Fax：0265-86-6638

活動の目的

良質な繭産地であり、養蚕・製糸の歴史と伝統が残っている長野県飯島町に勝山織物絹織製作所が平成13年開設された。古くからの蚕品種繭を用いて古来の糸づくりの方法で作った絹のブランド化を進め、地域の振興に活躍している。

絹織物の良さは、基本的には素材である生糸の質的要素によって決まり、この質的要素は蚕品種、繭保存法、繰糸法の組合せによって構成される。この質的要素は生糸の白度やツヤ、強伸度、織度などであり、織物の風合いや感触を左右する。蚕糸技術の歴史的経緯を見ると明治の中期以降、西欧型の量産体制により均質で統一された規格の生糸づくりや蚕品種の改良などで、それまでの素材の多様性を追求していた芸術的な織物づくりと一線を画し、蚕糸業からいわゆる産業へと移行してきた。

この様な背景にあって、大量生産で特徴を失ってしまった絹糸から、個々の持つ特徴を最大限に生かし、それに見合う染め、織り技法を駆使し、今では博物館でなければ見ることのできない絹織物に少しでも近づける物を創ることを願っている。絹織物を創る上で、妥協せず納得するその想いを大切にするために、養蚕から、製糸、染色、製織、仕上げまで全ての工程を一貫した物づくりを行なっている。



絹工房の全景

1. 工房組織と製品

①工房組織：

工房代表：勝山健史

工房責任者：志村 明 他3名

②主な製品：

着尺・羽織その他、和装品、洋装地（紳士ジャケット）、ストール、全て手作業にて製糸、染め、製織、仕上げを行う。

2. 活動状況

①原料繭：

養蚕から行っているため、蚕種を種屋から購入し、品種は指定する。

②繭の保存：

生繭を塩漬にして密閉し、殺蛹して保存しうる塩蔵法が主流。

③糸づくり：

生糸は当所で生産し、手廻し座繰り機を用いて繰糸する。可能な限り古代の製法に従って創るように心がけている。

④精練・染色：

藁灰から抽出した「灰汁」で精練。染料は天然染料のみ使用。染色も古代染色法を取り入れている。



工房に設置された織

3. 展示および販売

①展示会：

呉服の場合、個人展は問屋に対して発表しているが、問屋は小売店、消費者に向けた展示会を開催している。また、関係団体主催の展示会にも出展している。

②主な販売先：

呉服問屋（(株) 洛風林・ ツカモト（株））

③作品の今後の方向：

絹織物の新しい用途の模索

織道楽・塩野屋

代表者：服部芳和

所在地：〒602-8285 京都市上京区千本通一条下ル西側西中筋町 13

Tel：075-461-1995

活動の目的

塩野屋は300年前に西陣で絹織物の機屋を開いて以来の老舗であり、代表者の服部芳和氏は14代目にあたる。織道楽・塩野屋が織り続けている「緋御召」(かすりおめし)を日本の美意識として残していきたい。江戸時代から織の伝統と技術を受け継ぎながら、これからの新しい織物の世界を提案し、織の道を楽しむことをコンセプトに物づくりをしている。また氏は「柳条縮緬」(りゅうじょうちりめん)と呼ばれる西陣本シボ御召の普及に情熱を傾ける御召プロデューサーとして、着物の消費減少の時代にあって、果敢に挑戦している。平成16年には市内千本中立売上ルに小売店と工房をオープンし、手機を据えて手織りを誰もが体験でき、草木染めの実習もできて、人々に創る喜びを感じて貰いたい。また職人の工房を訪ねる工程ツアーも行っている。



代表者 服部芳和氏

1. 手創り職人とのネットワーク

塩野屋の「緋御召」を支えるのが西陣で仕事をする15種の職人達である。プロデューサーとしての服部氏は、まず作りたい柄、色、風合いのイメージを固め、各職人に伝える。15職のチームワークが円滑に進むよう月に一回の「本シボ15職の会」を開催しており、国内外の展覧会の情報、消費者から得た感触などを職人に伝えることが大切なポイントであり役目と考えている。

2. 職人の物づくり「緋御召」

①原料生糸：

群馬オリジナル品種の繭の生糸で、群馬の製糸工場で生産したものである。

②下撚り：

60年間、糸を撚っている西村泰一氏の撚糸工場で下撚りをする。

③糊つけ：

甘しょ澱粉と布海苔と米糊を混ぜて御召用の糊を調合するのは、長年のカンと経験が頼りであり、糊つけは渡辺長蔵氏が受け持っている。糊をつけることにより糸の保護と、撚りの戻り防止を図る。

④本撚り撚糸：

池田一雄氏の主宰する工場では本撚り撚糸を行っている。京都でも八丁湿式撚糸機を

動かしているのはわずか2、3軒となっている。

⑤精練・染色：

寺井一雄氏が精練と染色を受け持っている。指定の色を正確に染め出すことができる。

⑥整 経：

普通の着尺の経糸は1500本程度であるが、御召は着尺の幅を得るため5000本の経糸をかける。沼田靖史氏は巨大な整経機でこの5000本を均一に張り、「あぜ」を取り、最後に「千切り」に巻き上げる。

⑦糸括り：

緋模様に糸を括るのは、徳永 弘氏が担当している。6反分の糸を括り用大杵に巻き、芯墨（物差の役目）にしたがい括る部分に印をつけ、紐で固く括る。2色の場合は括り終えた糸を専門の染色屋が染め、再び括りの工程を繰り返す。次に5000本の経糸を竹箴に通し、「はしご」と呼ばれる道具で緋の柄をそろえて千切りに巻き取る。こうして整えられた糸は機場に運ばれ、緯糸が織り込まれて裂になる。

各々の職人が各自の作業を完璧にこなすことは言うまでも無く、次の工程が楽に、また支障の無いよう配慮しているところが西陣の職人氣質の一端であろう。

3. 着物から織物へ

絹素材を使い、西陣織の技術で着物とは違う織物を創り、健康に役立つものや生活の中で楽しめるものを京都から発信できるよう、以下のような物創りに挑戦している。

①浄肌衣（じょうきい）：

御召（強撚糸）の風合いで、健康に役立つ織物をとの思いで開発したのが、肌着・フレンチシャツ・タオル・マスク等の「浄肌衣」（じょうきい）ブランドができた。

②その他：

その他では、風羽タンクトップ・風羽パンツ・帯揚げマフラー等があり、珍しいものでは御召の生地で作ったコーヒーフィルターがある。



代表的な西陣矢絰

4. 展示普及

常設展示場に展示しており、関係団体が主宰する展示会にも出展している。今年度も伊勢丹新宿店、都立産業センター「オーガニックショー」、日本の絹展にも出展を予定している。

絹工房

代表者：矢野まり子

所在地：〒699-0403 島根県松江市宍道町西来待 1497

Tel：0852-66-0997

活動の目的

矢野まり子氏は絹織物の風合いと美しさに興味を抱き、天然素材である絹を追求するために沖縄・石垣島に渡り、糸作りから染織に至る研究を行なってきた。その後、ファッション業界に身を置き多様な生地に関する様々な知識を得てきた。平成8年に独立し、厳選したシルクによるオリジナルブランド「manufacture M」を東京で立ち上げた。

良い糸から良い布ができることを確信した氏は、こだわりの絹糸から本物だけが持つものづくりの価値を探求すべく、絹のすべての工程に関わり、原点から絹を作り上げることを理念として、平成14年に松江市宍道町に「絹工房」を開設し、絹のしなやかで美しい光沢と艶や、クオリティーの表現に努めている。



自然に囲まれた絹工房

1. 活動状況

現在、絹工房では数名のスタッフが物作りに励んでいる。また、絹に憧れ、染め織りに興味をもち、それらを研修する人の参加者も多い。

①原料繭の購入：

絹工房を開設するにあたっては、素性のはっきりした繭が購入できることと、繰糸及び染色に適した水が得られることを条件とした。

したがって、使用する繭は地元産（島根県）の繭で、特定の品種を農家に委託することもある。価格は農家またはJAとの話し合いで決めている。

②繰糸および染織：

座繰り器での生繭繰糸が主体であり、生糸織度は織物の種類により適宜選択している。

染色は草木染だけを行い、染料となる草木類は全て地元で採れる植物を使うとともに媒染剤も天然のものを使い、用水には井戸水にこだわって使用している。

手織機は高機を使用している。精練と撚糸には特にこだわりを持っている。



生糸を繭から小粋に

2. 主な作品と展示普及

主な作品としては、着尺・ストール・ブラウス・ジャケットなどである。作品の販売先としてはブティックや問屋もあるが、ほとんどの作品は展示会や絹工房への来訪者に販売されている。

展示会は定期的に行なっているが、この他に各種団体が主催する展示会に出展している。



植物で染めたストール・ブラウス等



着尺製品

本工房では糸繰りから生地を織り上げるまですべて手作業で、ものづくりへのこだわりをもって着尺を作っている。この絹工房から生まれた作品には、すべてに「素恵（すえ）」の商標をつけている。この由来は「素直にありがたく感謝する」という意味を込めて名付けられたものである。

綾の手紬染織工房

代表者：秋山 眞和

所在地：〒880-1302 宮崎県東諸県郡綾町北俣梅ヶ谷 4186

Tel : 0985-77-0156 Fax : 0985-77-2577

活動の目的

綾の手紬染織工房のルーツは沖縄にあって、先代の秋山常磐氏が大正 10 年当地にて染色業を興し、昭和 2 年には撚糸業も併設し“首里上布”などを開発している。戦争のため福岡に疎開していたが、昭和 26 年、沖縄から宮崎へ強制疎開していた人々の授産施設をつくるため宮崎に招かれ、沖縄の技法による織物を始めたのが工房の始まりである。

昭和 36 年に秋山眞和氏が染織業を引き継ぎ、宮崎独自の織物を目指して綾町に移り、新たな工房を構えて今日に至っている。

「現代の名工」として名高い秋山眞和氏が主宰する綾の手紬染織工房は“伝統的な染色法による絹織物の創作”をモットーに、養蚕から生糸作り、染め、織物まですべて一貫した手仕事で行っている。繭は当工房で飼育している日本古来の品種小石丸、糸は小石丸の生繰り糸、染色は可能なかぎり天然素材の草木染等、伝統の技を受け継ぎ、秋山眞和氏を中心に 28 名の職人が染織の創作活動に取り組んでいる。



主宰 秋山眞和氏

1. 活動状況

① 原料繭：

蚕品種は小石丸である。小石丸の蚕種も工房で作っている。養蚕は工房にある稚蚕飼育所で 3 令まで共同飼育した後、4 軒の農家で委託飼育される。

② 糸作り：

小石丸の繭を生繭の状態ですて煮繭、繰糸する。繰糸機は絹糸本来の質を引き出すために座繰り器を使用しているが、繰られた糸は小枠上で乾燥することなく外し、その後乾燥することによって縮みのある糸にする。



小石丸繭と生糸

③ 染色：

染色は、江戸時代以来の古法の「天然灰汁発酵建藍染め」や、日本産の貝による還元建染めの「大和貝紫染め」を開発するなど幅広い技法を手がけている。藍の甕（かめ）は 40 余基で規模としては日本最大級である。

④織物の創作：

織りは工房のルーツ、沖縄の伝統織物である花織りや緋の技法を用いて、現代に通じる斬新なデザインの布作りを行っている。

ブランド製品として、「綾の手袖」の和装品や「綾 COROMO」の洋装品がある。



大和貝紫

2. 製品の展示普及

製品の一部は工房ギャラリーにオリジナルのブレタポルテや、小石丸絹の花織で藍染めした緋の着物などを展示している。また、工房ギャラリーでは染めや緋括りなどの作業が見学できる。製品の展示はデパートでの個展をはじめ問屋を通して各地で行っている。また平成10年にはフランスのパリ日本文化会館で個展を開催している。製品は問屋を通して大阪、京都、東京方面に販売している。

なお、綾の手袖染織工房における伝統的な染色法による染織技術の保存継承、および新しい絹織物の開発や絹織物普及のため、宮崎県産業支援財団および宮崎 TLO との共同事業を進めている。



第37回日本伝統工芸展入選作
「万華鏡」



第42回日本伝統工芸展入選作
「陽炎」

参 考

藍は、庶民の色として縞や緋の糸染め、形置き of 文様染めなどに欠くことの出来ない有用な染料であった。しかし、明治・大正になって合成藍が輸入されるようになってからは、天然藍の使用は急激に減少してきたが、いまなお天然藍を愛しその技法を大切に守り続ける人々がいることは、世界的な視野から見て貴重な存在と言わなければならない。

まゆ織工房

代表者：上原美智子

所在地：〒901-1114 沖縄県島尻郡南風原町神里 373

Tel: : 0988-89-5208

活動の目的

絹の道シルクロードの東端にある日本では、糸と織物の優れた文化を築いてきており、世界に注目されてきている。これらは長い時間をかけて歴史・風土や人々の感性によって創りだされたものである。

中国を起源とする養蚕や織の技術が、日本に伝わったのは弥生時代と言われているが、中国と距離的に近い沖縄（琉球）は古くから中国との交易も盛んであったことから、本州よりも早く沖縄固有の織物作りが行なわれてきたのではないだろうか。それが伝統的な色や柄に象徴されている沖縄織文化の基礎になっていることが容易に想像される。

染織作家上原美智子氏は昭和 46 年柳悦博氏の下で織物をはじめ。多くの織物地に触れるうち、故郷沖縄の伝統的な染織品に強く意識され、昭和 49 年に故郷沖縄に帰り、沖縄の伝統的織物の技法を学ぶ。そして昭和 54 年沖縄本島南風原町に“まゆ織工房”を設立し、沖縄織りの伝統的技法を生かした沖縄の新しい織物作りに挑戦してきている。その代表的な織物が「あけずば織り」である。

あけずば織り

蚕が吐き出した一本の繭糸を経・緯糸に用い、世界で最も薄いと言われる手織りの布地である。3.0～3.7 デニールの繭糸一本使いであるため、布に織り上げるには糸の目が詰まり過ぎないように、同時に布の形を作るぎりぎりの呼吸で打ち込むなどの手間がかかり困難がつきまとうが、撚りがないことから生まれる独特のシボの表情や、織物としては全く重さを感じさせることがない透き通り光輝く絹織物である。トンボの羽より薄くという想いを込めて“あけずば織り”と名付けた。沖縄（琉球）ではトンボのことを“アーケージュ”と呼んだことからヒントを得たものである。染めは地元沖縄の植物からの草木染めにこだわっている。



制作風景

作品の展示普及

作品の個展は、年数回全国各地で個展を開催している。また、グループ展では東京国立近代美術館工芸館をはじめとして全国各地で毎年開催している。

海外展では平成 10 年のニューヨーク近代美術館での現代日本染織展を皮切りにドイ

ツ、マレーシア、インドネシアなど各国で開催し、国際的にも高い評価を得ている。平成15年にはイギリスで“Side by Side 二人展”を開いている。



2007年秋の展示 (London)



2007年秋の展示 (London)

人形の島久

代表者：田島祐幸

所在地：〒371-0023 群馬県前橋市本町 1-19-9

Tel：027-224-2335

活動の目的

昭和55年より三代目雛職人群馬県ふるさと伝統士田島祐幸氏が工房“人形の島久”を興す。日本の伝統文化であるお節句祝いを通じて、日本の手工芸の世界を残していく。現在、雛人形等の手工芸品も海外で安価に作られることが多くなり、日本の雛職人も激減している。当工房は江戸期より続く「桐塑胡紛技法」を受け継ぎ、次世代に手渡したい思いで雛人形を製作している。加えて、着物離れの現在、絹衣装の雛人形にこだわり、日本の美しい絹の輝き、光沢、手触り、着付けの美しさ、本物が持っている素晴らしさを雛人形等を通して触れてほしい。そのために群馬県のオリジナル蚕の生糸を使い、当工房が開発したこだわりの素材糸、デザイン等をもとにして京都西陣で裂地を製織し、雛人形を一体一体心をこめて作っている。



桑刈り・選繭・紅花摘み

1. 工房組織と製品

①人員構成：

代表者：田島祐幸氏

島久従業員：甲冑職人、彫刻家

協力者：養蚕農家 2～3 名、製糸 2～3 名、染色、織屋、羽子板職人、その他。

② 主な製品とその特徴：

前橋雛：舞姫（群馬伝統工芸品）、オリジナル羽子板、オリジナル兜鎧。

群馬ブランドシルクを使用し、正倉院裂、有職、能装束、名物裂文様でオリジナル織物をつくり雛人形、羽子板など作る。



羽子板

2. 活動状況

①原料繭及び生糸：

原料繭は「又昔」、「二又」及び群馬県蚕業試験場で開発した群馬ブランド繭「世紀・二一」、「ぐんま黄金」「新青白」等を種から収繭までを農家に委託している。

各種類の生糸は製糸工場に依頼するとともに、一部は座繰り糸を作っているが、品質にはこだわりをもっている。

② 加工：

多種多様な織裂地を必要とするほか、当工房が開発したこだわりの裂地を織るため、製織は京都西陣や桐生に依頼している。染色は製品毎に紫根染や茜染の古来から伝わる草木染をしている。



日本の伝統「お雛様」

3. 展示普及

駒ヶ根シルクミュージアム、栃尾市美術館、ジャパンシルクセンターに展示したが、今後、個展等を考慮中である。

現在、人形小売店や、一般ユーザーに直売しているが、このなかで特にユーザーの思い出の帯地や裂地で仕立てるオリジナル人形が好評である。

4. その他

平成 15 年より本年まで日本の原種である「又昔」を飼育し、京都在住の能装束研究家と共同で能装束裂地を製作し、“羽衣雛”を製作した。平成 17 年には、「又昔」の改良品種を大量に飼育しており、この繭を基に日本の昔ながらの技法である座繰り糸を用いて、草木染めした手織りの物作りを進める。